

- 「本格化する「世界史」への共同の取り組み」
南塚 信吾
- 「今、世界史について、何が議論されているのか？そして、何を議論すべきなのか？」
松本 通孝
- 「世界史叙述の認識論的な課題 (1) ——世界史論を中心に」
三枝 守隆

発行：NPO-IF 世界史研究所 <http://www.npo-if.jp/riwh/>

本格化する「世界史」への共同の取り組み

南塚 信吾

世界史研究所が発足して7年が過ぎた。この間の日本内外での世界史への関心の高まりは、われわれが考えていた以上の歩調で進んでいる。

まず指摘しなければならないのは、世界各地の世界史・グローバル史学会の組織化が急速に進んだことである。これまでのところ、このような地域組織としては、アメリカ合衆国を拠点とする World History Association (WHA)、ヨーロッパを中心とする European Network in Universal and Global History (ENIUGH)、アジアの視座から見るアジア世界史学会 (Asian Association of World Historians -AAWH)、アフリカを場とする African Network in Universal and Global History (ANUGH) があり、そのグローバルなネットワークとして、Network of Global and World History Organizations (NOGWHISTO) ができている。そして、2010年8月に開かれたアムステルダムでの国際歴史学会 (CISH) 理事会で NOGHISTO が正式に連携組織として承認された。したがって、2015年に中国で開かれる次期 CISH 大会においては、NOGHISTO は正式に連携組織として企画を運営することになった。

当然これらの世界史・グローバル史の学会では、来るべきそれらの大会において、競争するような勢いで、世界史・グローバル史のテーマを追求しようとしている。さしあたり予定されている大会は、以下のようである。

- ・ ENIUGH： 2011年4月 ロンドン
- ・ WHA： 2011年7月 北京
- ・ AAWH： 2012年4月 ソウル

さらに、とくに世界史・グローバル史に特化しているわけではない CISH も最近とみに世界史・グローバル史をテーマとする傾向を強くして来ている。今年 (2010年) の8月22日から28日までアムステルダム大学で開催された CISH の大会では、世界史・グローバルヒストリーが一つの大きな主題になっていた。前回のシドニー大会でも世界史ないしはグローバルヒストリーへの傾向は見られたが、今回はそれが飛躍的に進んだように思われる。つぎの2015年に開かれる中国済南での CISH では、この傾向はいっそう進むものと予想されている。2012年にブダペシュトで開催される CISH 理事会までには、AAWHを始め NOGWHISTO のメンバーは、しかるべきテーマを提案できるようにしなければならない。

最後に報告しておくべきことは、世界史研究所が組織として参加している AAWH についての活動である。同じくアムステルダムにおいて8月23日に AAWH の評議会 (Board of Directors) の第二回会議が開かれて、重要な決定がなされた。要点は、8月より、AAWH の書記局を大阪大学から韓国の梨花大学 (Ewha Womans University) に移すこと、書記長を大阪大学の秋田茂氏から梨花大学の Ji-Hyung Cho 氏に変更し、それに伴って、評議員を Ji-Hyung Cho 氏から秋田茂氏に交代したこと、そして、次回の AAWH の大会を、2012年4月に梨花大学において開催することを決めたということである。次回大会の Call for Paper は現在発信されており、これにはぜひとも多くの方々のご参加をお願いしたいと思っている。また、アジア諸国での世界史教育の実態を調査するためのアンケートを実施することも決められ、これもすでに依頼がなさ

れている。

以上のような組織的な取り組みと並んで、世界史・グローバル史への具体的な取り組みも、一步一步前進しつつある。日本国内だけをとっても、2009年の歴史学研究会、2010年の西洋史学会、茨城大学人文学部・地域史シンポジウムなどを挙げることができる。ここでその内容を紹介するゆとりはないが、高等学校において、大学において、そして各種の学界において、大きな議論、あるいは、ゲリラ的な演習が積み重

ねられつつあるようである。

世界史研究所としては、今後ともこういう動きを紹介し、その推進に貢献したいと考えている。ただ、これまで、ヴァーチャルな活動にこだわり続けてきたが、協力会員へのサービスが不十分であったという反省もあり、今回から、年に2、3回のペースで、ニュース・レターを紙媒体でも発行することにした。今後ともよろしくご協力をお願いする次第である。

今、世界史について、何が議論されているのか？ そして、何を議論すべきなのか？

松本 通孝

I. はじめに

2007年秋の世界史未履修問題以来、地歴教育の再編について、また世界史教育はどうあるべきかについての論議が歴史研究者・教育者から提起されてきた。本稿では、2010年7月の近現代史教育研究会での報告を基に、世界史教育の何が論議され、何を論議すべきなのかについて、筆者の考えをまとめてみたい。

II. 「何が論議されているのか？」

① 2006年秋「世界史未履修問題」後の世界史&世界史教育をめぐる論議の紹介と論点の整理

文科省サイドとしては、安倍内閣の下での新教育基本法、教育再生会議などの基本線の下で、「ゆとり教育」の修正をめざし、学習指導要領の改訂を進めたが、世界史未履修問題の解決の方向は打ち出せなかった。世界史の中に、地理的な背景、日本史の位置づけなどが、今まで以上に強調されたくらいであった。

一方、歴史研究者・教育者サイドでは、世界史研究所の緊急アンケート「世界史教育は不要か」をきっかけに、研究者・教育者の両面から論議が巻き起こった。要約すると、

- 1) 未履修問題の背景・・・大学入試の在り方、それに対応する高校の地歴教育の在り方に問題があるのは確かであるが、世界史教育は何のためにあるのかを考えるべき。
- 2) 現在の世界史教育の問題点・・・受験という箍をはずした時、何を目的にするのか？

中学「歴史」との関係、通史・概説、歴史的知識と歴史的思考力の問題について原点に立ち戻って論議すべき。

- 3) これからの地歴教育の在り方・・・「地歴基礎」「歴史基礎」の検討。その内容をテーマ史にするか、20世紀の世界と日本かなど、「地理」選択者の減少を考慮して論議すべき。

② 日本学術会議公開シンポジウム、紹介と論点の整理

(2008・6)

一方、日本学術会議は、世界史未履修問題の打開策として、上記の世界史研究所での議論を深めつつ、「高校地理歴史科教育に関する分科会」の油井大三郎委員長を中心に、次回の学習指導要領での問題解決を視野に入れて活動している。具体的には、次のような動きに要約される。

- ・2007・7 油井私案・・・1) 3科目必修、2) 「地歴基礎」「歴史基礎」、3) 3科目はそのまま。相互乗り入れ、4) 社会的な教科の復活を、世界史研究所のホームページに掲載し、広く意見の収集および整理を図った。
- ・2008・6 日本学術会議公開シンポ「高校教育における時間と空間認識の統合」

このシンポジウムは、油井私案をたたき台に、歴史分野・地理分野の研究者・教育者が、それぞれの立場を踏まえて報告したものであったが、事前の話し合いに欠けるところもあり、方向性を打ち出すには至らなかった。主な報告を要約すると、

- 1) 鳥越泰彦・・・受験を超えた地歴教育の魅力を考えるべき。しかし現実には、生徒の意識、教師の知識主義的地歴観、教員養成システムに問題がある。生徒が主体的に関わることが出来る科目が必要、そのためには単元学習、能力別学習により系統学習のみの地歴の克服を図るべきである。
- 2) 桜井由躬雄・・・現行教科書でも、日本史・世界史に相関する記述は多い。相互乗り入れを図るべき。あるいは日本史・世界史のリード部分を繋ぎ、世界の中の日本、歴史意識の形成に重点を置いた「歴史基礎」を考えるべき。
- 3) 小林正人ほか・・・地歴の総合的思考力としての「歴史基礎」「地歴基礎」。通史は困難であるので、主題学習中心に歴史的思考力の育成を図るべき。現実的に無理なら、各科目内に融合単元を設置。山口幸男氏も、日本史・世界史・地理の中に%を決めて入れる地歴融合単元に賛

成の報告であった。

③ 歴史学研究会大会特別部会「社会科世界史 60 年」、紹介と論点の整理 (2009・5)

特別部会では、小川報告のほかに、「社会科世界史の始まり」、
「大学における世界史教育は可能か？」が報告・討論された。
ここでは小川報告のみを要約する。

○ 小川幸司「苦役への道は世界史教師の善意でしきつめられている」

・嫌われる「暗記地獄」としての高校世界史。戦後社会科の中の高校世界史は用語数も少なく、「問いかげ」もあった。→ 現在は、時間軸と空間軸の丸暗記、60年で2倍に増えた用語数、教科書の進歩は新しい暗記を増やすだけ。その結果、生徒は世界史を敬遠しはじめている（センター試験）。しかも、暗記が好きだった生徒が、大学に入り世界史教員を目指している。

・世界史教育論として、世界史発足時にはあった「問いかげ」を大切にすべき。

歴史教育の「知の三層構造」として、「事件・事実」、「解釈」、「自分の生き方」を授業の中で取り組んでいく。

改革の方向として、教科書は『独仏共通教科書』をモデルとしたらどうか？ 大学入試は、小論文方式の導入を考えるべき。

「歴史基礎」には反対、理由は一定の歴史事実の習得は必要であるから。

「問いかげ」と「対話」が行われるような「歴史批評」としての歴史教育。

そのためには、歴史教育者の「語り口」の改革が必要ではないか？

④ 西洋史学会第 60 回大シンポジウム「世界史教育の現状と課題」、紹介と論点の整理 (2010・6)

シンポジウムでは、吉嶺報告の他に、主題学習、用語を大幅に減らしたモデル教科書をなどの提言がなされた。本稿では吉嶺報告のみを要約する。

○ 吉嶺茂樹「高等学校における世界史教育の現状と課題——『学びの崩壊』と称される困難校で、『それでも世界史が好き』と言ってもらうために——」

・必修の「通史」を全生徒がやらなければならないのか。世界史が好きな生徒は多い。しかし世界史は時系列、空間系列の理解が複雑だから、入試には別の科目で受験する傾向が強い。

・進学校では「世界史 A」は「世界史 B」の一部になっている。「世界史の扉」「21 世紀の課題」など誰もやらない。「世界史 A」は実質未履修。教員は「世界史 A」の全体像を持っていない。

・教員養成：入試で「世界史 B」＝通史をやってきていない学生が教師として世界史を教える。→ 提言：地歴免

許の必修に「世界史 A 程度の古代からの通史」、「面白く、考える概論」を実施すべきである。

・「歴史基礎」「地歴基礎」：進学校では誰もやらないだろう。用語の精選、半減へ。「世界史 A」を受験科目にし、80 点とれる問題を出したらどうか。

⑤ 東京学芸大学史学会報告 (2010・6)

私的事情により参加できなかったため、レジュメを要約・掲載させていただきます。大学生、院生への提言として注目される。

○ 日高智彦『『世界史教育の危機』をどう考えるか』

・世界史教員養成のための講座を大学に設けるべきか？
→ 日東西の寄せ集めでない世界史を。

・グローバル・ヒストリーは、世界史を再生させるか？

・世界史の面白さとは何か？ 世界史を学ぶ意味は何か？

・教員の意識はどう変わればよいか？

→ 提言：「知の三層構造」に賛成。→ 生徒との「対話」

を生み出すような「語り」をどう（授業なり、教科書なり、カリキュラムなどで）作ればいいのか？

最近試みていること：世界史通信、実物教材、絵画資料、現代との繋がり

歴史上の意思決定過程に生徒を置く発問

III. 「何を論議すべきなのか？」

1) 今日の世界史教育が抱える問題点・・・大学入試における「世界史離れ」現象、通史・概説の限界および歴史的思考力の育成について、問題点と思われることをいくつか挙げてみます。

・大学入試にどう対処するか？ 新しい学説、研究成果の取り入れで、用語はこれからも増え続けるであろう。世界史教育の現場を担う教師として、受験で世界史を必要としない 90% 以上の生徒に対して、どのような世界史教育を、どのような形で行うか？

また、受験する生徒に対しては、どう対処するか？ を真剣に考えるべきである。

・大学にとっての世界史（主に欧米史？）の知識の必要性和高校世界史が目指す理想との矛盾がある。大学側は、大学の授業にとって、どの程度の世界史の知識が必要なのかを提示すべきである（例えば、世界史 A の知識で十分であるとか、当学部は、戦後史をしっかりとやって来てほしいとか）。

・世界史受験が減ったら何がまずいのか？ 高校の先生か？ 大学の授業か？ 受験産業か？ 安易に大学の先生の不満に同調しないでいいのではないかと。私立大の場合、AO 入試・推薦入試を導入している大学が多く、一般入試でも、受験生獲得のため 1、2 科目受験が多くなってきており、入試による世界史的知識を共通に求めるのは無理になってきている。大学は、高校の世界史授業で最低何をやって来て欲しい

いかを発信して欲しい。

- ・通史、暗記詰め込み教育はなぜ必要なのか？ 授業時間が十分にあって、以前のように内容が西欧・中国中心で、現代史を殆どやらなかった時代には「通史」は可能であった。しかし五日制に伴う時間数削減の中で、今までのような通史は可能なのか？、効率の良い授業＝講義式、穴埋めプリントに依存する授業が増えるだけではないか？、それによって、歴史的思考力は育てられるのか？、また、暗記の得意な生徒は、歴史的思考力に優れていると言えるのか？、などの問題を原点に戻って考える時期なのではないだろうか。
- ・入試に出す用語数を精選すればよいのではないかという考えもあります。しかし、それで「世界史離れ」は解消するのだろうか？ 再び西欧中心、中国中心の出題に戻ってしまうのではないだろうか？
- ・現行教科書の「世界史への扉」「コラム」など、教科書執筆者が工夫していて面白い。しかし、なぜ使われないのか？ 生徒への問いかけ・調べ学習の手引きなどの教科書執筆者の工夫を、高校教師は授業に活かすべきではないだろうか？
- ・また、「現代の課題」も使われてない。生徒が生まれ育った「現代＝今日」と繋がらない「世界史」で良いのだろうか？ 現代史軽視は、昔から変わっていないが、21世紀を担う生徒たちが、今日の世界及び日本の現状・課題を自分のものとして考えなくて良いのだろうか？
- ・小中の社会科教育についても、5日制下、内容の精選により、歴史・地理とも世界の分野が大幅削減されてしまった。義務教育で扱う「歴史」が、日本中心の鎖国的、閉鎖的な歴史観のままが良いのだろうか？

2) 受験のためでない授業とは？ 世界史の面白さとは？

- ・「世界史離れ」について、生徒は本当に「世界史」がつまらないのか？ 私の経験では、「世界史は好き、でも暗記はイヤ」という生徒が多い。受験とは切り離して、世界史の魅力とは何かを、もう一度各教師が考えてみる必要があるのではないだろうか？
- ・受験のためでない生徒は勉強しないのか？ 文系にとっての理系科目、保健、家庭科なども受験には関係ないのではないだろうか？ 現在でも、9割近くの生徒は、世界史で受験してはいないといわれている。生徒がどのような世界史を期待しているのか？ それに応える世界史教育とはどのようなものであるかを先ず考えるべきである。
- ・授業時間減の中で、生徒全員に通史教育をするのは無理。時間数不足の中で、広く、浅く歴史の流れを追う通史だけでは生徒の歴史嫌いを助長するのではないか？ 生徒は、むしろミクロな世界史に興味・関心があるのではないだろうか？
- ・教科書に最新の学説を盛り込んでも、初めて習う生徒にとっては、何が新しい見方なのか分からない。教師が学び、理解し、この捉え方をすると、従来の見方に対して新たな

視野が開けると説明すべきでは？ また、多角的に、歴史的事象の相対化、歴史を学ぶ意味を、まず教師が考え、理解し、生徒に語りかけ、生徒とともに学ぶべきでは？

- ・「世界史」の面白さとは？ とりあえず「世界史A」を「世界史B」の補完としないで、「今日の世界」まで必ずやり、「世界史A」としてコラム・史料・主題学習・課題など、教師独自の授業プリントを駆使して、単なる知識の暗記にならぬよう努力をすべきではないか？ その中で、これだけは全生徒に必修として学ばせたい世界史とは何かを考えるべきではないだろうか？
- ・高校の世界史では、グローバルな時代におけるナショナリスティックな風潮の中で、自分を、また日本を相対化する眼を養いたい。そこに、世界史教育の大切さ、面白さがあるのではないだろうか？ その中で、歴史的思考力をいかに養うかが課題である。
- ・世界史を学ぶということは、授業だけにとどまらず、例えば「世界史通信」を発行したりして、世界史の話題は、テレビ・新聞などいたるところにゴロゴロしていることに気づかせることも必要ではないだろうか？ 授業を超えた生徒の日常生活の中に世界史を発見できないだろうか？ 例えば、ワールドカップ、修学旅行、在外体験談、美術展紹介、「原爆投下は仕方ない」発言、田母神論文などをめぐる紙上討論は、世界史に対する興味・関心、物事を歴史的に考える訓練の場とすることは出来ないだろうか？

3) これからの地歴教育の方向性 —— 「歴史基礎」「地歴基礎」をめぐって

- ・中学「歴史」「地理」分野の改革が必要ではないか？ 「世界歴史」「世界地理」の内容を中学校段階で学ぶべきである。「世界の中の日本」「東アジアの中の日本」という捉え方が義務教育段階で必要ではないか？ その結果、日本史に関する叙述を精選せざるを得ないであろう。
- ・高校の「日本史B」「世界史B」は詳しすぎるのではないか？ このような詳しい内容が大学教育に必要なものであろうか？ 中学校の「歴史」でも、十分に詳しい。研究のためには、詳しい内容より、歴史的な思考力、研究の仕方、論理構成、検索の方法などに重点を置くべきではないだろうか？
- ・「日本史A」「世界史A」「地理A」は、1年必修の「地歴基礎」として再構成し、①現行教科書の「世界史への扉」「現代への課題」「人物、モノのコラム」などを活かす教科書、②独仏共通教科書に見られるような簡単なリード、図版、地図、写真、年表、資料、「証言」などの資・史料を中心とした教科書、③歴史と地理の接点にあたる地図、農業・遊牧・産業、気候・風土、民族分布と国境、交易関係（海域世界、世界システム、現代の自由貿易体制など）を盛り込んだ新しいタイプの教科書を作成し、「学習の手引き」などを中心に生徒が自主的に調べ、学べるような授業を考える。2単位×30週＝60時間、日本と世界の歴史と地理に関する

約 30～60 のテーマに分け、その中の約三分の一を「20 世紀の世界と日本」に当てるといふ大胆な改革はできないだろうか？ 2・3 年は「日本史」「世界史」「地理」の中から 1 科目選択履修する。

・ただし、これらの改革によって、「世界史未履修問題」が解決するわけではない。また、地理の履修者減を食い止める案にもならないかも知れない。また、2 年・3 年の日本史・世界史の増加単位化する恐れは十分にある。センター試験の世界史受験者増には繋がらない。しかし、時間的・空間的思考を鍛える科目の設置は、21 世紀の日本の将来を考え

たとき、必須なのではないだろうか？ いずれにしても、現場の教師の地歴教育に対する姿勢、学校としての姿勢、大学として高校の地歴教育に何を期待するかを整理した上で、抜本的な改革が必要とされていると思われる。

以上、地理歴史科の基礎科目として、高校で教育を終える生徒たち、理系進学希望者、文系でも世界史を受験科目に必要としない生徒たちにとっても、また、大学教育を受ける際に自ら考え、調べ、分析出来る能力を高校時代に培う科目として「地歴基礎」を提案します。

世界史叙述の認識論的な課題 (1) ——世界史論を中心に 三枝 守隆

1 世界史論およびその背景と対象

世界史論という新しい学問分野が、日本の学界においては世界史研究所を含めいくつかの組織、個人により徐々に構築されている。世界史論とは、いうまでもなく、世界各国の歴史研究者が作りだした多岐にわたる分野の、膨大な量の実証主義的な研究成果を、どのような視点で、どのようにに取捨選択して、どのように統合して、一つの世界史という具体的な叙述に結びつけるかの方法や手順それ自体を研究対象とする新しい学問分野である¹。

世界史論が必要になってきたおもな背景は、まずもって「世界の歴史」を知りたいという知的な需要の増加であろう。二番目は、その需要に対して世界各国で教科書や翻訳を含む多くの世界史が国家的機関や出版資本²により供給されているのであるが、それらが読み手の知的要求に十分に答えていないことである。たとえば、世界史と称しても実体は各国史、それも主要な国家史や地域史の寄せ集めに過ぎない世界史があげられる。三番目は、従来は発言する機会が少なかった人々、すなわち少数民族、旧被植民地、女性、貧困層などの人々やその立場に立つ人々が学問的な発言力を徐々につけてきて、既存の歴史叙述や世界史叙述に異議申し立てをし始めたこと³。四番目は、世界各国の自国史の限界である。そもそも自国史を世界史から分離すること、つまり世界史のなかに自国史を包含しない世界史というもの、歴史的に見ればやや特殊な形態なのである⁴。自国史、すなわちナショナル・ヒストリーは人々を「国民」に鑄造するための文化的装置の一つとして各国で盛大に展開されてきたのであるが、愛国心を鼓舞すると同時に、他文明や他国に対するバランスのとれた理解を妨げている傾向があることは否めない⁵。五番目は、国際的な大小さまざまな軋轢の原因の一つには、世界各国の人々の意識下に刷り込まれたそうした歴史観にもある、という認識が国

際的に活動している人々のあいだに徐々に広まってきたことであろう。

一般に世界史を考えると、その媒体は「言語による叙述」といくつかの「図像」⁶であるという共通理解があるかもしれないが、しかし世界史の元型は「話し言葉」による「語り」であったと推定されるし⁷、現代ではテレビの歴史番組が増え、さらにインターネットによって世界各国の博物館や史料のサイトにアクセスすることも加速度的に可能になっている。こうした話し言葉・音響・映像の媒体、あるいは双方向型・参加型の媒体は、叙述という媒体とはかなり異なった性格を持っているので、その考察は別の機会に譲りたい。

この小論では、世界史とは言語による叙述を前提とし、それを「世界史叙述」と表現する。そして世界史叙述の正統性の根拠に関して論ずる。それは同時に、世界史叙述をどのような根拠をもって批判するのか、すなわち後述する「批判理論」としての性格も帯びている。

この小論は文字数の関係から 3 回にわけたい。その都度、読者のコメントを頂ければ幸いであり、可能であればそれを次の号に反映させていきたい。なお、この小論はあくまでも試論であって、世界史論構築の一助になることを願うものである。

2 従来の「世界史叙述に関する理論的考察」とその課題

世界史についての理論的な考察は従来からもあり、優れた研究も少なくない⁸。しかし現実に出版市場で流通している世界史⁹の編集方針に対し、そうした研究成果があたえた影響は小さいように思われる。なぜそうなったかという点、従来の世界史理論が後述するようにいわゆる「批判理論」としての機能を十分に備えていなかったからではないだろうか。

世界史論はそのようであってはならない。世界史論はその本性上、学問という知的に洗練された世界だけにとどまらず、玉石混淆の世界史が流通しているような、現実の社会や政治とも関わり合いをもたなければならない学問の一つなのだ。

世界史論の考察の対象である世界史叙述は、後述するように歴史学の一分野としては十分に認知されていないためなのか、学界から批判されることも多いとは言えない。むしろ文学作品とも見なされていないから文芸評論の対象にもなっていない。歴史教科書は批判されているが、それは主に自国史に対してであり、しかも必ずしも学術的で理論的な批判ばかりではなく、むしろ政治的な批判が多いようである。

こうした現状に対して、世界史論は、各国の出版市場で流通している世界史叙述を一定の視点から分析し、批判できるような理論を目指すべきだろう。そのためには、どのような理論でなければならないのだろうか。これが世界史論の第一の課題である。

3 学問的環境における課題

歴史学のなかでも認識論的な吟味はたびたびなされている。しかし現実には、個々の研究課題とその研究方法の学問的な正統性、すなわち認識論的な正統性の根源は、世界各国の各学会のなかの、さらに専門細分化されたいわゆる学問共同体の判断にゆだねられているのであり、このことは関係者のあいだでは周知のことだろう。もちろん、史学界においても「言語論的転回」¹⁰のような議論がなされ、日本では「従軍慰安婦問題」のようないわゆる歴史認識の問題が史学界の外部からも提起されて議論されたこともあった。しかしそれらが史学界の構造、なかでも学問共同体の存在を揺るがすことはなかった¹¹。

ところが、世界史叙述は二千数百年におよぶ長い歴史をもっているにもかかわらず、近代的な学問の方法、すなわち研究対象を分節化して没主観的に史料などを研究することが困難な学問領域である。見方を変えれば、世界史叙述の部分部分を切り出して、自然科学に類似した方法で研究するのが近代的な史学であるともいえるのかも知れない。比喩的にいえば近代史学にとって、世界史叙述とは打倒すべき前近代的遺物なのであろう。したがってマックス・ウェーバー的な意味での「職業としての学問」として世界史を専門的に研究する人はほとんどいなかった。世界史の学問共同体というものが充分には形成されなかったため、その学問的正統性の根拠を「専門家」にゆだねることもできなかったのである。

現代においても世界史叙述を取り巻く環境は、残念ながら大きく変化していないように見える。このことは、世界史を正規の講座として有する大学が世界的に見ても数少ないことや、あるいは大学院の史学科に進んだ学生のなかに、世界史を研究テーマとして選択する学生がほぼ皆無であることから推定できることだ。換言すれば、世界史叙述の認識論的な

正統性は史学界の中に求めることは今の段階では出来ないように思われる。それを引き受けるのが世界史論なのであるが、ではどのように、あるいはどこで引き受ければよいのであろうか。これを世界史論の第二の課題とする。

4 ナショナル・ヒストリーにかかわる課題

このような学問的環境に対して世界史研究所が着手したことの一つは、欧米でもまだ真新しい世界史研究の拠り所の拠点との意見交換の場をもうけ、各拠点のインターネットのサイトの相互リンクを設定しあうなど、継続的なネットワークを作り上げることであった。そしてアジアにおいても世界史に関心を寄せる歴史学者を集めてネットワークを立ち上げ、さらにアフリカ史の研究者の国際会議に参画するというように、世界的なネットワーク構築を推進してきたのである。これらのネットワークに参加している世界各国の研究者は多いとは言えず、歴史学の各分野の専門家ではあるが、しかし世界史論についての学問的な議論が世界規模で可能になったということは画期的なことである。

とはいえ、世界史論研究に専念できる環境、つまり継続的な資金をどのようにして確保し、研究者を養成していくかというような学問の世俗的環境についての議論はこれから深化させていかねばならないだろう。

世界史叙述はその独特の性格から、各国の教育文化にかかわる行政機関の立場から見ると、研究資金を投ずることを躊躇させる要素があるようにも見える。なぜなら、歴史学の多くの分野のように専門細分化という遮蔽がないから、世界史叙述や世界史論は、つきつめていくとその非ナショナリズム的な相貌を先鋭的に顕在化する可能性が考えられ得る。これとは対照的に、自国史的な歴史学は各国の政府機関とは適切な妥協点を見出しているように見える。そうでなければ、文書史料の多くを各国の国家機関によって収集させ蓄積させることはできなかったらうし、遺跡の発掘や文化遺産の保護も同様に国家的な事業として進めさせることは困難だったのであろう。後述するように認識論的には、ナショナル・ヒストリーという部分の集合が単純にゲシュタルトとしての世界史叙述にはならないのであるが、しかし、戦後独立した旧被植民地諸国の多くは、やっとなショナル・ヒストリーの構築のための文化政策を進め始めた段階であるから、世界史論においては、ナショナル・ヒストリーに対する批判をことさら先鋭化させる必要性はないように思われる。これをどのように理論的に正統化するか、いささか世俗的ではあるがこれが第三の課題であろう。

5 認識論的アプローチに至る背景

前述のように世界史叙述の認識論的な正統性を引き受ける学問的環境がとどっていない場合、どのようにすればよいのであろうか。

一般に、非西欧文明圏における各国の学界でよく見られるのは、西欧文明の同時代人の先行研究があればそれを引用し、同時代に先行研究がなければ近代史学の創始者たちとか、あるいは近代科学の創始者たちを引用したりして、権威づけることである。そしてその学問それ自体の認識論的な吟味を棚上げしてしまうことだ。「西欧に追いつき追い越せ」という暗黙裏の精神がこのような棚上げ的なアプローチを正統化しているのであろう。

ところが困ったことに世界史論はそのようなアプローチがとりにくいのである。

なぜなら、第一にその西欧文明にも世界史論の先行研究が少ないからである。例外はアメリカのP. マニングの研究であろう。その論考の対象が英米系を主とする西欧文明圏の世界史叙述と歴史哲学に限定されてはいるものの、体系的なアプローチは先行研究として位置づけるにふさわしい。しかし日本の研究は、少なくとも問題意識においてマニングから著しく遅れているとは言えないだろう。

第二に、前述のように、旧被植民地などの「歴史なき民」出自の人々やその立場に立つ人々から異議申し立てを受けているのが、まさに西欧文明が生み出した歴史叙述であり、間接的には世界史叙述なのである。

世界史論は、対象とする世界史叙述が「学術的」であるかどうか、つまり意識的な二次史料の操作だけではなくて、無意識的な史料や説明の操作が行われていないかどうかを問うことも、その機能の一つとしてもっている。一般的には「学術的」とは「科学的」とほぼ同義語であり、政治的、つまり政治権力に対しては公正で中立的であると理解されている。そして世界各国で流通している世界史叙述の多くは「学術的」であろう。しかし、もし対象とする世界史叙述が、人類の大多数を占めていた「歴史なき民」、つまり「未開人」や、文明化された社会であっても「貧困層」の人々や「女性」についてほとんど叙述されていない場合には、はたして公正で中立的と呼べるのであろうか。旧被植民地の歴史研究者や、あるいは女性の研究者でも疑問を感じる読者は少なくないはずだ。また既存の多くの世界史叙述に使われている用語、たとえば「近東」とか「新大陸の『発見』」というような言語や説明の仕方についても、批判的に観る読者は、後述する批判理論の影響などもあって徐々にふえていっているのである。したがって、世界史論においては無自覚的に西欧文明の視点、あるいは西欧文明の生み出した学術語に極端に固執することは、好ましくない。少なくとも、西欧文明中心の世界史叙述を単純に正統化するような世界史論は、われわれの望むものではないはずだ。

第三に、この二つ、つまり、いわゆる近代的な学術的な世界史叙述と西欧文明中心の世界史叙述とを明確に分離することが極めて困難なことである。西欧文明中心の世界史叙述は西欧文明圏の歴史研究者だけの専有物ではない。むしろ非西

欧文明圏の研究者の方が強いくらいなのである。それは「学術的」という名目で、自己を西欧文明圏の歴史研究者と同一視する研究者によって擁護され、共有物となっているようにも思われる。すなわち、精神分析でしばしば観察される「同一視の病理」¹²、つまり自分を強者と同一視して劣等感から逃避する防衛機制としての同一視に近似しているように思われる。やっかいなことに、そのなかでも集団同一視は強固な心的状態であるようだ。

6 認識論的アプローチ

ある学問の正統性を認識論的に論ずる者にとって、三つの立ち位置、すなわち三つの視点がある。それは、対象を見つめるその学問の視点、その視点を見つめる視点、そして両視点に浸透している言語というもの、つまり言語それ自体について見つめる視点である。ここでの場合、最初の視点は世界史叙述を見つめる世界史論であり、二番目は世界史論を見つめるこの小論であり、三番目は世界史叙述、世界史論、そしてこの小論で使われている言語と、そして「見つめるという行為」それ自体にも浸透している言語を、これまた言語で考察するということである。

この三番目の視点に認識論的な問題が存在するので、これを中心にした吟味を次に展開していきたい。

注)

- 1 世界史研究所の「設立趣旨」とマニングの主張に依拠した。南塚信吾 (2004) 『「世界史研究所の設立にあたって」』『世界史研究所 Newsletter』第1号、1頁；Manning, Patrick (2003) *Navigating World History: Historians Create a Global Past*, New York: Palgrave Macmillan.
- 2 B. アンダーソンの「Print capitalism」の概念を参照。ベネディクト・アンダーソン (1997) 『増補 想像の共同体——ナショナルリズムの起源と流行』白石さやほか訳、NTT出版、76-94頁。
- 3 たとえば、M. フェロー (1985) 『新しい世界史——全世界で子供に歴史をどう語っているか』大野一道訳、新評論。世界史叙述を含む世界史全体の理論を論じたものとしてウォーラーステインの著作がある (I. ウォーラーステイン (1997) 『新版 史的システムとしての資本主義』川北稔訳、岩波書店、134-154頁)。「人類の半プロレタリア化した人々は、完全にプロレタリア化した人々 (私的な食料生産から完全に疎外されている人々) よりも低賃金労働を強いられ、両者あわせて人類の85%は、200年前よりも劣悪な生活環境 (スラム街や農村、あるいは家庭内労働) に転落している」というウォーラーステインの主張は、世界史論にとって示唆的である。
- 4 日本における自国史と世界史の分断について系譜論的に論じたものとして、佐藤正幸 (2004) 『歴史認識の時空』知泉書館、339-347頁。
- 5 たとえば、鳥海靖 (東大名誉教授) やチョ・グァン (高麗大教授) による『日韓歴史共同研究 第2期報告書』(2010)には、研究対象は歴史教科書に限定はされているものの48本の学術的な論文が包

含まれており、「日韓相互のオリエンタリズムの克服」などは学問的な成果であろう。しかし、全体としてみれば学問的・実証的な議論とは言い難いように思われる(『毎日新聞』、2010年3月24日朝刊、東京版)。ナショナル・ヒストリーの限界についてはヨーロッパにおける動向が多くの示唆を含んでいる(近藤孝弘(1998)『国際歴史教科書対話——ヨーロッパにおける「過去」の再編』中央公論社)。

6 地図と年表は無意識のうちに人々の空間的・時間的な位置づけを規定しているから、世界史においてはことのほか重要である(佐藤、前掲書、49-179頁)。

7 たとえば、ランケの世界史はバイエルン国王マクシミリアン二世に口頭で講じ、その際の質疑応答が元になっている。ランケ(1941)『世界史概観』鈴木成高ほか訳、岩波書店、43-45頁、247-249頁。

8 たとえば、日本の史学界の骨格であった「日・東・西」の枠組みの上に組み上げられた世界史の克服を目指したものは40年近く前からあった。齊藤孝(1971)「世界史の理論(二)——世界史の課題」(荒松雄ほか編『別巻 現代歴史学の課題』(岩波講座世界歴史30)岩波書店207-228頁)。世界史のモデルを考察したものとしては、成瀬治(2001)『世界史の意識と理論』(『世界歴史叢書』(1977)の復刻版)岩波書店; 樺山紘一ほか編(1998)『世界史へのアプローチ』(岩波講座世界歴史1)岩波書店; 高谷好一(1996)『「世界単位」から世界を見る——地域研究の視座』(地域研究叢書2)京都大学学術出版会。世界史を総合的に論じたものとしては、歴史学研究会

編(1995)『世界史とは何か——多元的世界の接触の転機』(講座世界史1)東京大学出版会。ほかに興味深い視点を提示するものとして、岡田英弘(1992)『世界史の誕生』筑摩書房; 謝世輝(1988)『世界史の変革——ヨーロッパ中心史観への挑戦』吉川弘文館。

9 日本国内で流通している、つまり出版市場だけではなくて図書館に蔵書され今でも貸し出し記録がある世界史叙述は、筆者が調査した範囲では63著書、巻数にして116巻であった(2005年9月、首都圏において。ただし学校教科書とその副読本は除く)。古いものでは2005年に日本弘道会より刊行された、西村茂樹(1870)『萬国史』の復刻版。戦後の世界史叙述の原型にあたるのは、世界の歴史編集委員会(1949-1954)『世界の歴史』(全6巻)毎日新聞。最長の世界史叙述は、ソビエト科学アカデミー(1959-67)『世界史』商工出版社ほかの全34巻。

10 ゲオルク・G・イッガース(1994)「歴史思想・歴史叙述における言語論的転回」(『思想』第838号(1994年第4号)、76-93頁)。イッガースが、R. パルトやJ. デリダらが提起した言語論を歴史叙述に特化して論じた点は画期的である。

11 中村政則「言語論的転回以後の歴史学」(『歴史学研究』第779号(2003年9月)、29-35頁)。

12 ここでの「同一視 identification」は精神分析の用語として用いる。「同一化」とも訳される。

今後は年2、3回のニューズレター発行を予定しております。

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。

文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2010年12月28日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-17-3 渋谷アイビスビル10F
tel: 03-3400-1216 fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp URL: http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/

スタッフ

所長 顧問

南塚 信吾 (法政大学教授)
下村 由一 (千葉大学名誉教授)
百瀬 宏 (津田塾大学名誉教授)
Ivan T. Berend (UCLA 教授)

研究員

木村 英明 (早稲田大学講師)
木村 真 (日本女子大学講師)
姉川 雄大 (千葉大学普遍教育センター特任教員)
崎山 直樹 (千葉大学人文社会科学科特任教員)
鹿住 大助 (千葉大学普遍教育センター特任教員)
鈴木 健太 (東京大学大学院博士課程)

